

MACF礼拝説教要旨

2021年4月25日

【慎み深く・・・】

ローマの信徒への手紙12章3節～8節

12:3 わたしに与えられた恵みによって、あなたがた一人一人に言います。

自分を過大に評価してはなりません。

むしろ、神が各自に分け与えてくださった信仰の度合いに応じて慎み深く評価すべきです。

12:4 というのは、わたしたちの一つの体は多くの部分から成り立っていても、すべての部分が同じ働きをしていないように、

12:5 わたしたちも数が多いが、キリストに結ばれて一つの体を形づくっており、各自は互いに部分なのです。

12:6 わたしたちは、与えられた恵みによって、それぞれ異なった賜物を持っていますから、預言の賜物を受けていれば、信仰に応じて預言し、12:7 奉仕の賜物を受けていれば、奉仕に専念しなさい。

また、教える人は教えに、

12:8 勧める人は勧めに精を出しなさい。施しをする人は惜しまず施し、指導する人は熱心に指導し、

慈善を行う人は快く行いなさい。

パウロは極めて具体的な勧めを書き始めています。

1) 過大評価ではなく慎み深く

ここでは教会の中での人間関係について触れているのですが、教会という共同体の中で、自分への過小評価というのは健全ではありません。「わたしなんか全然役に立っていないからいい方がいいのです」というような発言は健全ではありません。あなたの存在は大切です。

でも、同時に「自分だけがこの関係を支えている柱だ」とか「この役割は絶対人には譲れない」というような考えもまた健全ではないのだと思います。

パウロはここでは「慎み深く」自分の役割や存在を考えるように促しています。

これはイエス様の教えの中にも明確に語られています。

ルカによる福音書17章

「17:10 あなたがたも同じことだ。自分に命じられたことをみな果たしたら、『わたしどもは取るに足りない僕です。しなければならぬことをしただけです』と言いなさい。」

2) それぞれが違う働き、支え合うという絆

体はひとつ、しかしそれぞれの部分が繋がって体が動き成長していくわけですね。

その一部を担っているパーツはどんなに他の部分から見て目立っても目立たなくても大事な存在であり、なくてはならない「かけがえのない存在」なのです。そういう存在同士がつながりあい、支え合っているからこそ元気な体が動き出すのです。

決して、極端に自己否定しないように、自己評価を下げすぎてはなりません。

あなたが「存在する」ことこそ、体に対する最大の貢献だと思って良いのだと思います。

そして、また、決してひがんだり、妬んだりしないように要注意です。

それぞれの働きが必要だからです。

3) 恵みによる賜物

そして、その働きをパウロは「恵みの賜物」と呼び、預言・奉仕・教え・奨励・施し・指導・慈善などの分野についての言及がなされています。

「賜物」とはそれぞれが持っているいわゆる能力ということと全く同じわけではありません。賜物は「カリスマ」と呼ばれますが語源は「カリス」（恵み）です。

つまり、神様がわたしたちひとりひとりに与えてくださる賜物は神様の恵みを表明し、それを表現するために各自に与えられた能力や役割、また促しなどのことを言うのです。

賜物のゆえに、自らが有名になるとか、自らの「誇りの材料」が増えるというのは「恵みの賜物」とは別物だと思った方が良いでしょう。

しかし、神様は私たちひとりひとりに賜物を与えてくださっています。

恵みを表明させようとして与えてくださっていますので、それを自己をアピールするために用いることは罠にハマってしまうことになります。

多くの場合、自分に託された恵みの賜物は、後になって気づいたり他者がそれを指摘してくれることで自覚できるようです。

最初から、自分はこれができるから、これこそ神の賜物だと

思い込む必要はありません。神はあなたが「自分のもの」という意識を離れた「何か」を用いることが多くあります。

心配せず、ゆったりと、神の恵みを味わい、謙遜に、神様が私に神様の恵みを表現させるために何かをお与えくださっているらしい。

それがしっかり用いられますようにと祈りつつ、日々を暮らしたいものです。

祝福がありますように

++++

「MACF礼拝説教映像」はこちらです。

<https://youtu.be/ZipEucQ5VFA>